

## 世の中を変えるために

山形県寒河江市立陵東中学校

三年 逸 見 駿太郎

僕達の一票で世の中を変えることはできないのだろうか。

日本は、選挙権を十八歳まで下げるといふ政策を行った。しかし、十代・二十代の投票率は上がっていない。「面倒くさい、自分の投票くらいでは世の中は変わらない。」と思う人が多いからだ。

今、国内では「選挙に行くことが面倒くさい」といふ問題に対して、様々な対策を行っていることを知った。アウトドア衣料品メーカー「パタゴニア」の日本支社は、投票日に全国二十二の直営店すべてを臨時休業にしたと新聞に載っていた。これは、従業員に投票へ行くように促し、顧客にも選挙について考えてもらうのがねらいだそうだ。

山形大学小白川キャンパスでは、投票日に対して、十日間早く期日前投票所を設けたそうだ。これは、当日投票に行けない人も積極的に利用することができるといふのがねらいなのだろうと思う。

さらに、僕が通っている陵東中学校では、「生徒会役員選挙」という生徒会組織を作るための大切な行事がある。責任者を選んで、自分のやりたい役職に立候補し、朝や昼の選挙運動や全校生の前で立会演説会を行う。それを受けて、全校生徒が投票す

るといふ本格的な内容だ。中学生でも、選挙についての経験があり、それなりの知識もしつかり得ているのである。

僕は、その選挙でボランティア委員長に立候補した。初めは友達や先生から推されて立候補を決めたが、選挙活動を進めていくうちに、自分の手で学校を変えていきたいと思うようになった。陵東中学校は、「あいさつ」「合唱」「ボランティア」の三つの柱に力を入れている。実を言えば、その中の一つが僕が引き継いでいきたいと、一年生の頃から思っていた。自分で演説の内容を考えるのは大変だったが、自分の決意を伝えることができ、ボランティア委員長に当選することができた。

この経験から、改めて投票で選ばれることの難しさを知った。立候補している人達は、選挙運動や演説する重圧に耐えて、世の中をよりよくしようとしているのである。選挙に参加しないということは、立候補した人の思いを見えぬふりをしているということだ。僕達の一票はそれほど重いのだ。

さて、現在の日本の政治は、高齢者が生活しやすい政治になってきている。その原因は私達若い人にあるのだ。全世代の平均が五十五%に対して、二十歳から二十九歳までの投票率が約三十五%と、二十%も低い。つまり、若い人達の意見よりも高齢者の意見の方が反映されやすく、若い人達が生きづらくなるという悪循環になっているのだ。

若い人が生きづらくなっていると思ったのは、授業で「税金」について習った時だ。日本には「社会保障」という制度がある。その中でも、「年金」に使われる費用が五十五年前は年間一兆円にも満たなかった。それに対して今は、五十五兆円も給付されていることがわかった。つまり、高齢者対策にたくさんのお金をかけていることになる。

高齢者からみたらうれしいことだろう。だが、僕達がいざ大人になった時、生きづらい世の中になっているのは絶対に嫌だ。そのためには、今の大人達には選挙に参加してもらわなくてはならない。しかし、今の現状では若い人の投票率が低く、高齢者の意見の方が強くなっている。つまり、今の政治を変えるには、若い人の投票率を上げなくてはならない。働き始めの十代・二十代の人達が選挙に参加し、自分達の考えを反映させていくことで、これからの僕達の生活を安定させていくことにつながるのだ。

選挙に参加することは、ボランティアに参加することと同じである。僕は、今年の夏、YYボランティアに参加して、たくさんの方と出会った。友人の笑顔、先生方の笑顔、訪問先の園児達の笑顔、自分の笑顔。僕はとても楽しかった。「ボランティアはさせていただくものだ。」と先生方がおっしゃっていた。つまり、自分とは無関係だとか、意味がないとか思うのではなく、何事にも関心を持ち、自分のためになることを見つける。こういったところから世の中は変わっていくのだと思う。

自分にとってマイナスなことを考えるのではなく、プラスなことを考える「プラス思考」を持つことが、今、僕達がやるべきことだ。

選挙を人任せにしても、これから生きていく自分を苦しめていくだけだ。つまり、僕達の一票は世の中を変えることができるのだ。僕達もあと三年後に投票ができる。その時は僕は必ず選挙に参加する。そして、

「選挙に行こう。」  
と友達に声をかけていく。